長谷川忠一先生を偲んで

飯　岡　　透

昭和61年８月２日午後11時５分，駒沢大学経済学部教授長谷川忠一先生は急性肺炎のため，聖マリアンナ医科大学付属病院で逝去された。享年70歳であられた。

先生は昭和27年本学商経学部（経済学部の前身）に助教授として就任され，爾来30有余年の長きにわたって経済学部で教鞭をとられたが，この間商学科主任，大学院商学研究科委員長の要職を歴任されて商学科の充実と発展に多大の尽力をされた。

また先生は大学院及び学部の演習を中心に多くのすぐれた学生を世に送り出すとともに，経済学部課外ゼミナールの１つとして税務会計研究会を創設され，職業会計人を目指す学生を熱心に指導されてこられた。

私がはじめて先生とお会いしたのは，私が早稲田の院生だった昭和33年頃で場所は私の恩師佐藤孝一先生の研究室であったと思う。先生は私が商学部の学生であった頃から早稲田で非常勤講師として教鞭をとられていたが，私は先生の授業を履修する機会に恵まれず，その時お会いするのが始めてであった。ほぼ30年も前のことなので，先生とはじめてお会いして何を話したかは全く記憶にないが，江戸子らしい早口で威勢のよい先生だというのが率直な第一印象であった。

その後，度々佐藤先生の研究室でお会いし，私が若気の至りで外国文献から学んだ生かじりの理論などを振り廻すと，先生は会計学は実践と結びつかなければ意味がないといつも諭された。私が現在，財務会計制度や監査論に

関心を向けるのもその影響かもしれない。

やがて，私は先生のお世話によって本学で教鞭をとるようになり，研究室も先生と同室であったうえ，先生の仕事をお手伝いしたこともあって，身近に接する機会が多くなった。

先生の学生に対する指導は厳しくまた毒舌を吐くこともあったが，学生の面倒はよくみられ，殊に就職については多くの学生がお世話になっている。また先生は細心で几帳面な人であった。とくに約束時間には厳しく，私も時間に遅れてお叱りをうけたことが一度ならずあった。おそらく休講なども病床にあったとき以外はほとんどなかったものと思う。

大正生まれの多くの人々と同じように先生も戦争の影響で研究者としてスタートされたのは遅かった。それにかかわらず，先生はわが国における税務会計論の第一人者として数多くの業績を残された。なかでも昭和43年に出版された「税務会計入門」（同文舘刊）は大学における税務会計論の定本として各大学で採用され多くの版を重ねた。また監査論の新しい領域として税務監査の研究に取組み，昭和50年に「税務監査の基礎理論」を完成させたが，この業績は先生の学位請求論文ともなった。

昨年５月に２度目のお見舞にうかがったとき，先生はなお学問に対する情熱を失わず，税務会計論の体系化に執念をもやされていた。

駒沢大学就任以来の20数年，ご指導を賜った先輩を失ったことは，先生が人一倍健康そうであっただけに，私にとってほんとうに残念なことである。先生のご冥福を心からお祈りしたい。